



江戸初期の数寄屋橋

- ▶ 銀座の歴史-1 江戸時代の銀座
- ▶ 平成13年度の事業と予算
- ▶ 国際交流入門 - ㊸
- ▶ 区内文化施設紹介 小津史料館

銀座の
歴史 1

江戸時代の銀座

都市史研究家 野口 孝一

古くは、江戸時代以前、銀座地区一帯が江戸湾の海の中にあったとするのが一般的でしたが、研究が進んだ結果、今では江戸前島の先端部分に位置し、すでに陸地化していたというのが定説となっています。ただし現在の銀座地区すべてが陸地化していたかといえますと、疑問も残ります。

徳川家康が豊臣秀吉に関東移封を命ぜられ、三河の旧領を捨てて、天正18(1590)年江戸へ入国しました。家康はただちに日本橋本町の町割りを行い、江戸城下町の整備を行いました。

慶長5(1600)年、家康は関ヶ原の戦いに勝利し、同8年征夷大将軍となり、江戸に幕府を開くと同時に、江戸前島の埋め立て・整備を行いました。これは天下普請のかたちをとり、諸大名に命じて石高千石につき一名の大夫を出させ、土地の造成を行いました。造成の中身は陸地部分の嵩上げ、整地および海岸線の埋め立てでした。尾張町(銀座五・六丁目。以下数字のみに省略)、出雲町(七・八)、加賀町(七)、山城町(六・七)の町名はそれぞれ造成を担当した国名をとって名付けられたといえます。ただし加賀町、山城町については、開発を担当した加賀平右衛門、堀山城守藤原清次(御釜師堀浄甫)からとったともいわれます。

銀座地区の町名はこのように、①造成を担当した大名の国名をとって名付けられたもののほかに、②開発者の名からとったもの、③御用町人の拝領屋敷の名からとったもの、④集住した職人たちの職種の名からとったものがあります、②に該当する町名に弥左衛門町(四)、滝山町(六)、宗(惣)十郎

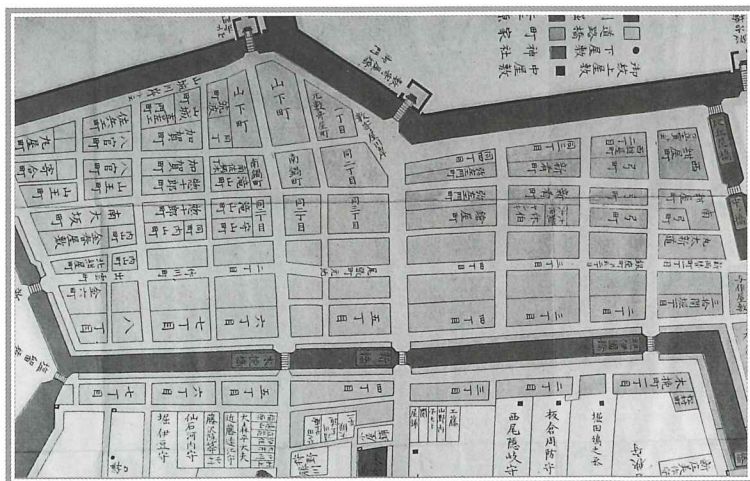
町(七)、南金六町(八)があります。すべてについて説明する余裕がありませんので、弥左衛門町についてのみ述べます。

弥左衛門町は、もともとは日比谷お堀端にあった草創名主長谷川弥左衛門の土地が、寛永5(1628)年に幕府に召上げられ、その替え地として現在の銀座四丁目並木通り両側の地を与えられ、弥左衛門町となったといえます。2代目から伊左衛門を名乗り、代々弥左衛門町に住んでいましたが、明治5(1872)年の銀座大火のころ、第11代目が銀座の土地を処分し、今戸の別邸に移転したといえます。

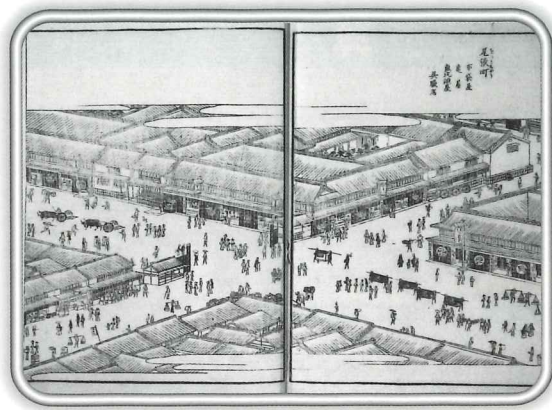
③の御用町人の拝領屋敷の名からとったものに銀座があります。銀貨鑄造所としての銀座は、慶長17(1612)年に駿府の銀座を江戸京橋の南四か町に移し、寛政12(1800)年、松平定信の寛政の改革の一環として「取締り不行届き」を理由に日本橋蛸殻町へ移転を命ぜられるまで銀座にありました。

銀座の町名は、正式には明治2年に決定されました。その時の銀座の範囲は京橋から銀座四丁目交差点までの中央通り両側の一〜四丁目です。それ以前には新両替町一〜四丁目と呼ばれていたとされています。江戸初期の市街の様子をほぼ正確に描いたもともとも古い地図といわれる寛永江戸図(「武州豊島郡江戸庄図」1632年)、およびそれについて古い明暦江戸図(「新添江戸之図」1657年)には新両替町と表示されていますが、寛文江戸図(「新板武州江戸之図」1661年)では銀座一〜四丁目であり、延宝7(1679)年の「江戸方角安見図鑑」では新両替町となっており、それ以後の江戸図はほぼ銀座一〜四丁目と表示されています。ところが、元禄5(1692)年刊行の『萬買物調方記』の中の記述には京橋南一〜四丁目として出てきます。また、延享元(1744)年の沽券図(国立国会図書館蔵)を見ますと、銀座一〜四丁目の表示があります。

沽券図というのは現在でいえば、地籍図と土地台帳を兼ね備えたもので名主の手元に保管されていたものです。いわば公式文書であるわけですから、その当時は銀座一〜四丁目の町名が一般に使われていたということになります。ところが面白いことに文久元年改正再刻の尾張屋版切絵図「京橋南築地



「京橋南築地鉄砲洲絵図」(文久元年)中央区郷土資料館蔵



「江戸名所図会」長谷川雪旦画 中央区郷土資料館蔵

鉄砲洲絵図」（前頁）によりますと、一丁目のところは「新両替町一丁目」の表示があり、二丁目のところには「銀座町トモ云、二丁目」となっており、幕末の段階では両方の町名が一般に使われていたということでしょうか。なお、新両替町というのは、銀座周辺に両替屋が多く集まり、日本橋の本両替町に対して新両替町と呼ばれたのです。

こうして見てきますと、現在の銀座一～四丁目の大通り両側は、「新両替町」、「京橋南」、「銀座」の三通りの呼び名があったことになります。橋を起点とする名称「京橋南」は町名が決まるまでの便宜的なものであったとも考えられますが、「新両替町」と銀座の町名のどちらが先に生まれたのか、正式町名が「新両替町」と「銀座」のどちらであったのか、さだかではありません。

なお、銀貨鑄造所としての銀座のほかに、主として贈答用に使われた大判を調整する大判座が銀座一丁目東側にあり、それに併設して、全国の秤に使用する分銅を造る分銅座がありましたし、銀座表通り新橋寄りの竹川町（七）には、朱座があり、それぞれ拝領屋敷を持っていました。

町名とはなりませんでしたが、観世屋敷、金春屋敷も拝領屋敷です。

徳川家康は駿府に居るころから能楽に親しみ、江戸入国に際して観世太夫を引き連れて江戸に下り、やがて猿楽を武家（幕府）の式楽とし、観世を筆頭に、宝生（保生）、金春、金剛の四流を家元と立て、のち金剛から分かれた喜多を一流として太夫格としました。元禄6（1693）年ころの作といわれる『国花万葉記』によりますと、観

世太夫は弓町（二）に、金春太夫は山王町（八）に、金剛太夫は滝山町（六）に屋敷を持っていたことがわかります。なお、宝生太夫は中橋大鋸町（京橋一丁目）に、喜多七十郎は中橋上楨町新道（八重洲一丁目）に屋敷を持ち、能役者の屋敷がすべて中央区内にあったこととなります。

金剛太夫は延享初年（1745年ころ）に下谷へ、

金春太夫は安永末年（1780年ころ）、に麴町へそれぞれ移転しましたが、観世太夫だけ江戸幕府崩壊まで弓町に留まり、屋敷には立派な能舞台がありました。金春の名は「金春通り」、銭湯の「金春湯」、映画館の「金春館」、「金春芸者」の名で知られていますが、幕末まであった観世屋敷が忘れられ、金春の名が今に伝わるのは、明治以降、金春芸者の名が広く知られるようになったためです。

能役者の拝領地は一般の町人地とは別格であり、かつ武家地でもなかったために、若年寄の直接支配を受け、町奉行配下の与力・同心の支配を受けなかったため、能役者の貸し長屋には芸者とその関係者も住みつくようになりました。当初は14,5名でしたが、しだいにその数が増え、周辺の町にも広がり、幕末になると現在の銀座七、八丁目あたり（中央通り西側）に芸者の数が200名ほどとなりました。明治以後、金春芸者の名にかわって新橋芸者と呼ばれるようになりましたが、「金春通り」、「金春湯」に名を留めているわけです。近年夏に金春通りで金春流能楽が演じられ、恒例の行事となっています。

④の集住した職人たちの職種の名からとったものに、鎗屋町（三・四）、弓町（二）、南鍋町（五・六）、南紺屋町（一）、西紺屋町、新肴町（三）などがありますが、これらの町の起源は、家康の江戸入国に従った鎗屋や弓師、鑄物師（鍋）が屋敷を拝領したことに始まります。拝領屋敷ということから考えますと、③の分類に入りますが、同じ職種の人たちが集住したという点でここに分類してよいでしょう。外濠沿いに京橋北の北紺屋町から南紺屋町、西紺屋町と数寄屋橋のところまで

細長く続くのは、紺屋たちが染め上げた布を外濠の水に晒す必要があったためでしょうか。

江戸時代の銀座の街の佇まいを描いた資料はなかなか見当たりません。江戸の名所を写し取った天保5（1834）年刊行の『江戸名所図会』には「尾張町」と「金六町」の図が二つ載っているに過ぎません。「尾張町」の図は山下御門から東海道筋へ出た四辻のところで、現在のみゆき通りと中央通りが交差するあたりを描いています。当時江戸で有数の呉服店であった布袋屋、亀屋、恵比須屋が描かれ、銀座でもっとも賑わった場所で、銀座でもっとも繁華な町角は銀座四丁目ではなく、銀座五丁目角でした。「金六町」は東海道筋の茶屋として賑わったしがらき茶屋の店前の様子を描いています。これを見る限りでは銀座は大変賑わっていたと言わなければなりません。

もうひとつ、江戸時代半ばころ銀座を描いたスケッチがあります。奥州南部藩の参勤交代の道筋を、霞ヶ関、桜田あたりから山下御門を通して東海道筋へ出て、左折して京橋一日本橋一浅草橋を渡って日光街道、奥州街道をたどり、国元までの道中を描いた画帳仕立ての「増補行程記」（盛岡市中央公民館蔵）というもので、宝暦元（1751）年の作です。八代藩主南部利視の命を受けて、家臣の清水秋全が描いた苦心の作品です。図をご覧いただけないのが残念ですが、山下御門、外濠、現在のみゆき通りを通して銀座五丁目の角を曲がって、四丁目を抜けて京橋にいたる街並みは、途中省略が多く、正確さに欠けますが、八官町の由来や愛宕山、浜御殿を遠く望み、恵比須屋、浜田屋の表示が有り、山下御門付近の外濠には水鳥が多いと記しています。これが描かれた宝暦年間（1751～63）にはまだ銀座鑄造所があったはずですが、記載のないのが不思議です。

この画帳は参勤交代の道中を描いた性質上やむを得ないことですが、みゆき通りと銀座通りのみで街道からはずれたところは描かれていません。しかし、銀座の町並みを描いたものが少ないだけに、大変貴重なものです。

この画帳は復刻されていて、東洋書院刊行の『増補行程記』で見ることができます。

平成13年度の事業と予算

平成13年2月28日に開催された理事会で、平成13年度の本協会の事業計画及び予算が審議され、議決されました。
つぎにその概要をお知らせします。

平成13年度事業計画

1 文化振興事業

(1) 機関誌の発行

「中央区文化・国際交流振興協会だより」を発行して、区民に文化振興並びに国際交流に関する協会の事業等の情報を提供し、その理解を深める。

(2) 芸術・文化の普及

① コンサート

区民に親しみやすい音楽鑑賞の機会を提供し、地域の文化活動の推進を図る。

年1回 平成13年10月19日(金)
参加200名 参加料 1,000円
夜間 月島社会教育会館

② 文化講座

中央区に関係のある各種の文化及び歴史について専門家のお話を聞き、理解を深める。

平成13年11月～12月
参加80名 4回(週1回)
築地社会教育会館

③ 古典芸能鑑賞会

日本橋劇場落成記念を兼ねて、中央区ゆかりの芸能人を通じて古典芸能を鑑賞する。

開催日 平成13年6月16日(土)
年1回 午後6時開演 参加440名
参加料 1,000円
企画・制作 中央区古典芸能の会
会場 日本橋公会堂ホール「日本橋劇場」(中央区日本橋区民センター4・5階)



④ 文化振興事業助成

中央区文化・国際交流振興協会の目

的とする事業を推進するため、区民が主体となって行う文化振興事業の実施に要する経費の一部を助成する。
文化振興事業助成 6件

2 国際交流振興事業

(1) 姉妹都市との親善・国際化の推進

① 中央区国際交流のつどい

区内在住・在勤等の外国人に中央区を紹介するとともに伝統芸術文化を周知しゲーム・踊り・懇談等を通じて、市民的交流を図る

実施日 平成13年12月1日(土)
月島社会教育会館
在住・在勤の外国人 60人
ボランティア関係者 60人
日本人参加者 60人

② ホームステイ・ホームビジットの実施

姉妹都市等関係のある都市の紹介のある外国人に対しホームステイを行なう。

また、区内在住在勤の外国人が、日本の日常生活を知り、交流を望む人に対しホームビジットを行なう。

③ 姉妹都市親善写真展

姉妹都市であるオーストラリア・サザランド市と相互に写真を交換し、写真展を開催する。

年1回 (区役所ロビー、日本橋区民センター、月島区民センター)



④ 日本語指導・交流会

外国人に日本語を教えるとともに、ボランティアと日本語で話し合う指導・交流会を開催する。

毎月3回(第1第2第3水曜日、8月1月第1週は休会) 午後6時～8時
年間32回 女性センターブーケ21

⑤ 日本語交流員養成講座

外国人に日本語を教え、交流をするボランティアを養成する。

平成13年10月9日～11月30日 全8回

定員30名

⑥ 外国船等の歓迎式

晴海埠頭に着船する外国客船に対して、東京都港湾振興協会等とともに歓迎式を行なう。

⑦ 交流都市調査

海外交流の推進を図るため、外国の都市との交流・調査を行う。

⑧ 姉妹都市提携10周年記念サザランド市紹介の夕べ

サザランド市を区民に広く知ってもらうためパネル展示、ビデオ等により紹介。オーストラリア産ワインによる交流を実施

平成13年10月2日(火) 午後6時～午後8時 日本橋社会教育会館

⑨ 国際交流推進事業助成

中央区文化・国際交流振興協会の目的とする事業を推進するため、区民が主体となって行う国際交流推進事業の実施に要する経費の一部を助成する。

国際交流推進事業助成 3件

3 ボランティアの登録と育成

(1) ボランティア活動

自らの意志で、主体的にボランティア活動をやってみようとする人たちに対して、その輪を広げるため、協会を媒体として、他のボランティアとの連携・一体化を推進させるため、例月会議を設けて、ボランティア間のコミュニケーションをはかる。

平成13年度予算

<収入>

| 科目 | 予算額(円) | 説明 |
|------|------------|-----------|
| 事業収入 | 631,000 | コンサート等参加費 |
| 区補助金 | 34,219,000 | 中央区補助金 |
| 雑入 | 3,000 | 預金利子 |
| 合計 | 34,853,000 | |

<支出>

| 科目 | 予算額(円) | 説明 |
|---------|------------|----------------|
| 事業費 | 13,431,000 | |
| 文化振興費 | 8,532,000 | 文化振興事業に要する経費 |
| 国際交流振興費 | 4,899,000 | 国際交流振興事業に要する経費 |
| 管理費 | 21,322,000 | |
| 人件費 | 20,137,000 | 職員に要する経費 |
| 管理運営費 | 1,185,000 | 事務局の管理運営に要する経費 |
| 予備費 | 100,000 | |
| 合計 | 34,853,000 | |



いま、世界各地で多民族化が急速に進んでいる。とりわけ第一次世界大戦以来続いた紛争、災害、経済格差の顕在化などによって、アジア、中東、アフリカ、中南米からアメリカ、カナダ、オーストラリア、イギリスやフランスなどの欧州共同体諸国に多くの人々が移動したからだ。これらの国々では、ときおり民族差別問題が発生するが、それにもまして注目すべきは、多くの学校で異文化理解のための教育がとり入れられていることだろう。

異文化理解教育というのは、地域内に住む民族的に異なる人々のさまざまな文化（言語、宗教、衣食住などの生活習慣）や価値観を理解することによって民族間の融和を図ろうというものから、もっと地球規模で環境、平和、人権などに理解を深めて人類全体の幸福を追求しようというものまで、幅広い。しかし、一地域内の民族融和のためであれ、人類全体の平和や幸福のためであれ、異なる民族およびその生き方を理解することによって、共存共栄の道を探ろうという点では、共通する。

人は、ときとして、民族という鎧を着て無意識に他民族を差別したり、排他主義に陥ったりするが、異文化理解によってそのような狭隘な考え方から脱し、いわば隣人を愛するようになるだけでなく、自らの世界を広め、人間性を深めることができる。そのための異文化理解教育である。さきごろ、日本のある県でコーランが破り捨てられ、イスラム教徒が抗議するという事件が起きた。犯人は日本人なのか、イスラム教徒に反感をもつ在住外国人なのか、あるいはどういう意図で破り捨てたのか不明だが、いずれにせよ事件は特定の宗教に対する冒行行為であり、異文化共存への挑戦と言える。また、日本の大学には、たくさんの留学生が来ているが、日本人学生はアジア諸国やイスラム圏などから来た留学生との交流にあまり積極的ではない。異文化理解教育は、このような偏狭な他文化否定や他文

化への違和感をなくするためにも不可欠であろう。インターネットの普及によって、人々が国境や民族の違いを容易に越えることができるようになったこの時代に、このような異文化理解教育の必要性はますます高い。

冒頭にあげた国々では、マスメディア、芸能、教育、経済、政治など、ほとんどあらゆる分野で、明らかに外国系と思われる名前の方が活躍している。どの分野でも、さまざまな文化を背景にする人々が混在しており、人々は必然的に互いの



日本語指導・交流会にて（体験学習の佃中生徒）

文化を尊重しながら生きることになる。日本では、マスメディアでさえ外部寄稿者や出演者は別として日本名以外の記者や解説者の名前を見かけるのはさきめて稀である。政治の世界では地方自治体を含めてほとんど皆無といってもよい。こうした状況では、日本や日本人を無意識に特殊視あるいは優位視したりする傾向が生まれやすい。ナショナリズム高揚という名のもとに、人類共通の価値観より民族（文化）や歴史の違い、個々の人間より国家を強調しようとする人もいる。私たちが国や民族に所属している以上、そういうものに誇りをもつのは当然だとしても、そのために他の民族や文化を拒絶すれば私たちは国際化そのものを否定することになる。

異文化理解教育の対象は、もちろんどんな年齢層でもよい。実際に、成人向けに、メディアや社会人学級のような場がそのような教育の機会を提供している。しかし、小学生や中学生の学校教育にと

り入れたら、効果はさらに大きいだろう。アメリカやイギリスでは、さまざまな文化圏の言葉、宗教、慣習について学んだり、実際に他の文化を「体験」したりする時間を設ける学校が多い。その場合、「国際化」とか「人類」といった抽象的概念ではなく、地域社会のなかで具体的に考えていこうという姿勢が強く見られる。

ここでは、インターネットで得た情報をもとに、カナダのエドモントン市の例をみてみよう。市内の中心部に近いところに位置するセント・キャサリン・コミュニ

ティ・カソリック校（12年制）は、周辺に中国人街を控えているだけでなく、ベトナム、フィリピン、ラテンアメリカなどからの移民が多く、生徒たちは45%を占めるベトナム系を中心に多種多様だ。先住民の生徒もいる。そこで、学校では英語の「書き方」教育を見直し、移民の親の学校参加を高め、多民族クラスにおけるグループ活動を増やす方法を講じている。カンボジア系の生徒が45%、中国系とベトナム系が15%、

先住民系が15%という近くのマクドゥーガル校では、数年前に起こったいざこざを契機に、多文化リーダーシップというクラスを設けた。これは、生徒たちが校内の異なる文化集団について学び、また文化誤解に関する寸劇を作って人種差別撤廃国際デーに披露することによって相互理解を深めよう、というものだ。比較的に高学歴・高所得層の多い市南西部にある高校でも、生徒たちが最近とみに多民族化してきたことを受けて、教頭、教師5人、生徒14人、外部アドバイザー1人で構成する学校調和委員会や、同校の生徒たちが話す英語以外の言葉について考える多言語プロジェクトを発足させた。現在、映画俳優だったインディアンの詩を、生徒やその親たちが60を超える言語に翻訳する作業を進めているという。

まず身近なことから始めよ。異文化理解教育には、これがもっとも効果的であろう。

区内文化施設紹介



昭和通りに面している史料館入口

今回は小津和紙博物館の中にある史料館をご案内しよう。紙商の古文書に遺されている江戸。展示史料の数々が町のたたずまいを、人の暮らしぶりを雄弁に語りかけてくれる。

小津史料館

その史料館は昭和通りに面した日本橋本町2丁目のビルの地下奥にあった。「なぜここに?」。紙商小津が日本橋大伝馬町に開業して345年の記念事業に平成10年開館したという。ここでは江戸から東京へと時代は変わりながらも区内で紙の商いを続けてきた小津家に遺されてきた史料1300余点を順次展示している。



館内

江戸の史料から

創業者清左衛門は伊勢松阪の出身で江戸大伝馬町（現日本橋本町3丁目）に承応2年（1653）29才で店を構えたという。その頃の大伝馬町は奥州街道をはさみ300メートル以上にわたって伊勢商人を中心とする木綿問屋の店が並んでいた。

大伝馬町は幕府公用の伝馬役を課せられる一方でさまざまな特権を与えられたこともあり商人の町として大いに繁栄した。その賑わいと二階に黒塗りの串窓が並ぶ三階建ての立派な家並みは錦絵の格好の題材ともなった。後日安藤広重（1797-1858）の筆による東都大伝馬街繁栄之図〔東京都立中



大伝馬町繁栄之図（安藤広重） フィルム小津史料館蔵

央図書館所蔵〕には小津清左衛門の店が描かれている。

小津家の当主は代々、清左衛門を名乗るが初代の清左衛門長弘（玄久）が松阪に隠居した後書きしたためたという掟書は、今も墨の色も黒々として300年以上も経っているとは思えないほどだ。掟書とは文字通り店員が守るべきおきて（店則）。主人が記した店の者への戒め書きでありながらその書から江戸がどのような時代であったか窺い知ることができる。



掟書（玄久掟書）

「100%楮（こうぞ）の和紙に書かれた文字は1000年でも残ります」とのこと。江戸三店の沽券（土地・家屋の売渡証）、と沽券図もある。桐の箱に入れられ代々蔵の中で大事に保管されてきた様子がしのばれる。

相撲番付けのように仕立てた「江戸じまん」という商人番付け表があった。どのような商いが盛業だったのか知ることができても面白い。時代劇によく登場する屋号入りの千両箱も展示されている。



名入り千両箱

明治の史料から

小津本家略系図によれば開業者清左衛門長弘より十二代目で明治を迎える。維新で混乱をきわめた流通を安定させるため明治12年に有力紙問屋が発起人となって設立された最初の和紙同業



江戸後期—大正12年まで現存した土蔵造りの本店店舗

組合「巴卯（きぼう）一番組紙問屋」の看板もある。「温故而知新」の書は沢沢栄一翁（1840-1931）が小津の経営理念として特に書かれたものだという。和綴りの決算書「店算用清長目録」は昭和4年の合資会社設立まで使われていた物だそうだ。紙相場表もある。さすが紙商、記録史料の豊富なことこの上もない。

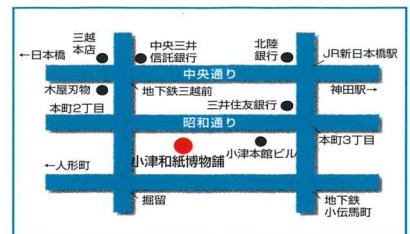


店算用清長目録

小津史料館は紙を通して私達の街の歴史を身近に感じることができる所だ。近くのホテルからもよく外国人が来るという。江戸の紙文化を知るうえでも貴重な史料館だ。（MT）

和紙史料余話

国産の紙が和紙と呼ばれるようになったのは明治になって洋紙が入ってきてから。手漉きと機械漉き和紙とがある。紙の楮（こうぞ）を栽培し普及に努めたのは聖徳太子だといわれている。風土に密着して作られものだけに今も美濃紙とか石州半紙とか特色のある和紙が多くあり、書画用だけでなく電気スタンドのシェード、鼓の裏張りなどにも使われている。



交通：地下鉄銀座線「三越前A4出口」より4分、日比谷線「小伝馬町5番出口」より5分、JR総武線「新日本橋5番出口」より8分。日本橋本町2-6-3 小津ビル地下1階。

開館日：月—土 10時—6時。日曜日、12月28日—1月3日休館。（ただし1月4日は特別に開館。日本橋七福神めぐりに協賛のため。寶田恵比寿神社が近くにある）。

銀座はおとなのまち。「空気の色も時間の流れもほかのまちとはちがう！」と言う人もいます。多くの人生ドラマの舞台となったこのまちの歴史を郷土資料室の野口先生にお願いしました。区内文化施設紹介では、日本橋の老舗、和紙問屋の資料館。創業1653年。歴史の重みを実感できるところです。

発行：中央区文化・国際交流振興協会
〒104-8404 東京都中央区築地1-1-1
中央区役所2F
TEL. 03-3546-5586